[二〇〇七年度大会シンポジウム] 特集　日本思想史の問題としてのキリシタン——思想と暴力

キリシタンと「殉教」の論理——キリスト教伝来の意味と殉教への道——

五野井　隆史

はじめに

二〇〇七年六月、ローマ教皇庁はペトロ岐部と一八七人の日本人キリシタンを福者とすることを公表した。当時、「殉教」についてはポルトガル語の Martyrio「マルチリヨ」が用いられ、殉教者は Martyr「マルチル」と言い漢字で丸血留と書かれた。「丸血留」は「マルチリヨ」にも宛てられている。天正遣欧使節が一五九〇年にリスボンから将来した活字印刷機によって一五九五年に天草のコレジオで出版された『羅葡日辞書』によると、

Martyr: testimunha: Xôconin, xôjeqinin. Deusno gofôcô-ni taixite caxacuvo vqe, inochiuo sasageraretaru jennin「証拠人、証跡人：デウスのご奉公に対して呵責を受け、命を捧げられたる善人」

Martyrio: Testimunho: Xôjeqi. Deusno gofôcônitaixite caxacuuo vqe, Inochiuo sasaguru cotouo yù「証跡：デウスのご奉公に対して呵責を受け、命を捧ぐことを言う」

Martyr の語源は、ギリシャ語 μάρτυς (martys) で、マルチスとは裁判所で真理のために証拠を立てる人、即ち証言する人を意味する。

キリスト教の宣教を通じて、キリシタンたちはイエス・キリストによって与えられた救いの福音を知ると共に、イ

エスが十字架に懸けられ復活したことを常に想起しながら信仰生活をした。彼等が早くから「キリストに倣いて」Imitatione Christi に触れ、聖人伝を読み聞かせられたのは、イエスと共に生きることを強く求められたからである。十字架に付けられた神の子イエスの受難（パション）を常に意識してその証し人になること、そのためにイエスに倣って一命を捧げるための教育が宣教の初めから行われた。彼等は「丸血留」について何によってどのように教えられ、理解し実践したのであろうか。

1　迫害と殉教者への崇敬

二年以上日本に在ったフランシスコ・ザビエルの日本宣教の将来に対する展望は決して楽観的ではなかった。それは彼が日本に派遣する宣教師について提言する条件から窺われる。「最大の苦難は絶え間ない明らかな危険にさらされていること」、「ここはあらゆる種類の罪の温床地」（ロヨラ宛一五五二年一月二九日付書翰）であり、「彼等（宣教師）は坂東やその他の諸大学に行けば、坊主達から烈しく迫害を受けることになる。彼等は厳しい迫害を受けるにちがいない」（シモン・ロドリゲス宛一五五二年一月三〇日付）と指摘する。彼はまた中国への出発前にゴアの同僚に語った講話の中で、日本宣教のための役割と資格、及び能力を持った者を彼等の間に見出せないと言い切る（フロイスの一五七六年一月一七日付）。

最初の殉教者は一五五八、九年頃平戸で見られた。博多でも山口から避難して来たアンドレが同地での戦乱中に一五五九年の復活祭後に殺された。彼はエルサレムで最初に殉教した聖エステヴァンを模範とし、抵抗せず跪いて祈りながら斬られた。イルマンのフェルナンデスは「聖エステヴァンを模範としたので、彼を殺す者のために祈ったことはまちがいない」（同年一〇月五日付）と報ずる。

豊臣秀吉が伴天連追放令を発令した一五八七年七月以降、大友義統の領内では、宣教師の退去後も府内近在で平信徒の看坊の指導により信仰は維持された。このため、翌年七月義統は府内近郷の高田の教界を世話していた看坊、鍛冶屋ジョランとその妻子を処刑し、由布院の看坊で刀鍛冶のジョウチンをも殺害させた。長崎で二六人が殉教する以前に、二四件の殉教事件があった。

殉教者を崇敬し、これを礼拝の対象として顕彰することは、古代ローマ帝国時代の殉教者を崇敬する「聖人伝」や「黄金伝説」を通じて教えられたキリシタン達にはごく普通の行為であった。鍛冶屋ジョランの遺骸は、彼の後継者の看坊葛木オルガンティーノによって肥前高来の八良尾の

セミナリオにもたらされて同所に埋葬され、のちさらにマカオに運ばれた。

二十六殉教事件直後、彼等の衣服や流された血の滲んだ土が聖遺物として持ち去られた（アビラ・ヒロン『日本王国記』）。彼等に対する列聖運動は一六〇四年に始まり、「京坂信徒代表の列聖請願書」が慶長八年一二月二六日付で教皇クレメンテ八世に提出された。そこには、「然者二十六人の人々まるちりに御なり候上は、おかミ（拝み）申へきと存候へハ、我等か伴天連被仰候は、いまた、はつはさま（バッパ）より御ゆるしなく候間、おかむ事ならさるよし被仰候ニよって、もろもろのきりしたん、まるちり乃真を見付、かほとまて忠節を尽し、てうす（デウス）に対し一命をはたし玉ふ人々を貴まぬ事を、かなしミなけきて、御詫言を申あけたてまつる。……」との文言がある。二回目の列聖運動は、フランシスコ会のルイス・ソテロ神父の主導によって京都・伏見・大坂・堺のキリシタン四〇名が署名した慶長一八（一六一三）年八月一五日付の請願書が作成され、一六一五年一一月一五日教皇パウロ五世に奉呈された。同宿のペトロ岐部は一六一四年三月に筑前秋月で殉教した七郎兵衛マティアスの遺体を掘り起こして長崎の教会に運んだ。これは殉教者の列聖調査に備えてマカオに移送するためであった。

2　「De Imitatione Christi」と聖人伝

中世のヨーロッパで愛読された「イミタティオ・クリスティ De Imitatione Christi」は、「新しい信心 Devotio Moderna」運動の精神的拠り所となった修養書で、イエス・キリストの人性に注目してイエスに従って生きるべきことを説いている。これは「コンテンツス・ムンヂ」、「トマス・デ・ケンピスの作品」、あるいは「ジェルソンの書」と称され、一五五四年日本視察のためにゴアを発ったヌーネス・バレトの携行品目録に四点、「殉教者列伝」、「聖人人名録」も各一冊見られる。「イミタティオ・クリスティ」の強い影響を受けて、イグナティウス・デ・ロヨラが執筆したのが「霊操」である。

「イミタティオ・クリスティ」すなわち「コンテンツス・ムンヂ」は、すでに一五八一年に日本語に翻訳され、一五九六年にローマ字本「コンテンツス・ムンヂ」が天草で印刷され、一六〇二年には国字本が長崎で、一六一〇年に京都で国字本「こんてむつすむん地」が印刷された。一六一三年には長崎で一三〇〇部が印刷中であった。キリストに倣って真理を証し、受難（御ぱしょん）の苦しみに堪え、栄光（ぐらうりや）に至るべきこと、天国へ行く道である十

字架を負うこと、十字架にこそ救いがあることなどが説かれ、最初は写本によって、一五九六年以降には印刷本によってキリシタンに広く流布した。

一方、「聖人伝」の翻訳は、永禄・天正年間に個々に行われた。前記山口のキリシタン、アンドレがローマ初期教会の殉教者エステヴァンを尊崇していたことは、「聖人伝」が宣教開始当初から親しく読み説かれていたことを示している。同じ一五五九年にヴィレラ神父は、入洛を前に日本人ロウレンソに「サントスの御作業」について語り彼を励ました。「作業」とは「行状・行い」であり、「サントスの御作業」は「聖人の行状記」ということになる。一五九〇年に来日したマノエル・バレトは日本語習得のために主日のミサに用いられた福音書の成句を編纂して所謂『バレト写本』を作成し、その後半部分に「サントス（諸聖人）及びサンタス（諸聖女）の栄光と生涯」と題して三二編を収録した。一冊にまとめられた聖人伝が、一五九一年出版の『サントスの御作業の内抜書』である。同書巻二の後半には聖人伝とは別に、殉教の意義について述べた「マルチリヨの理」が収められている。これは、ドミニコ会のルイス・デ・グラナダが一五八二年に出版した『信仰序説 *Introduccion del simbolo de la fe*』から引用・抄訳されたものである。グラナダは一五八八年に上記の書を改訂・要約して出版したが、その第五部が一五九二年に印刷された『ヒイデスの導師』で、巻第二に殉教伝が紹介される。ペドロ・ラモン神父がこれを邦訳した。日本準管区長ペドロ・ゴメスは、一五九〇―九三年に『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』を編集し、「真実ノ教 Veritas Compendio」巻第一、第一ノタラタアト（論稿）「第二十三」で、「マルチルにならん為に、如何なる仕合ある時、敵の手に身を渡すべきやと云事」（尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱Ⅱ』）について論じている。

「聖人伝」に見られる聖人の多くは、ローマ帝国時代の四世紀までの殉教者である。一三世紀にドミニコ会のヤコブス・ヴォラギネが「聖人物語」を編集し、一五世紀末には「新しい信心 Devotio moderna」運動の高まりに呼応して「黄金伝説」が編集され、殉教者の伝記が高く評価されるようになっていた。ローマの異教世界に宣べ伝えられたキリスト教が苛酷な迫害に遭遇する中で多くの殉教者を出し、彼等の流した血がキリスト教会の種子となって実を結びローマ教会の基礎が作られたとの認識は宣教師の誰もが持っていたであろうから、異教世界の日本における宣教活動の進展に伴って迫害を経験してきたイエズス会宣教師は、その状況がローマの初期教会における有りように酷似していたためローマ初期教会の先例を日本の新しい信者達に指

し示したかのようである。一五九七年の二六人の処刑により、宣教師は改めて殉教に対する覚悟と心構えをキリシタンに教え諭す必要を実感した。準管区長ゴメスは、この事件によるキリシタンの動揺を鎮め、堅信のためにマルチリヨに関する書き物を作成し、これを日本語に訳して印刷することを命じた。その書き物ではマルチリヨの誉れと有効性、マルチリヨに要求される条件、迫害の時代に持つべきマルチリヨへの意向とそのための準備について述べられた（一五九八年度イエズス会日本年報）。これは、一六一五年以降に作成されたとされる「マルチリヨの勧め」「マルチリヨの心得」（『耶蘇教叢書』）の原型をなすものであった。

3　「殉教の書」と殉教の覚悟・準備

浦上一番崩れ（寛政二―七年、一七九〇―九五）の際に、長崎奉行所が没収した写本を村上直次郎が一八九六年（明治二九）に長崎県庁で確認し、これに「耶蘇教叢書」と名付けた。姉崎正治はこれを「寛政没収教書」として紹介し、殉教に関わる三書を翻刻し『切支丹宗門の迫害と潜伏』に収めた。ここでは殉教に関する三書を仮に「殉教の書」と称する。第一の書「マルチリヨの鑑」（仮題）は三童貞女の殉教記である。

第二の書「マルチリヨの勧め」（仮題、『キリシタン書 排耶書』（岩波書店、日本思想大系）では「丸血留の道」とする）では、イエス・キリストのキリシタンに対する「御恩」と、キリシタンのイエス・キリストに対する「奉公」が論題の中心に据えられて「マルチリヨ（丸血留）」について、その意味と品格、それに対する覚悟のほどが六章にわたって説かれる。

一章では、キリシタンの上にペルセギサン（迫害）があるようにデウスが計られたのは何故かと問い、迫害から生じる功徳（徳義）が無量であるためにデウスがそのように計られた理由と目的が述べられる。特に、二つ目の理由としてデウスが御身の力の程を顕し給わんためであるとし、「エケレンジャ（教会）はペルセギサンを以て衰え給わず、却って猶栄え給う」とし、「マルチレスの御血はキリシタンダデ（教界）の種子の如」きものであるからとする。キリシタン教界は弱く絶え果てるように見えるけれども、却って信仰の強いキリシタンの心中に信仰を固めることになる、と説く。また四つには、すべてのキリシタンがデウスの御恩を理解するためにご折檻としてペルセギサンがあるように計られたからで、その御恩とは御法（みのり）を弘め後生を扶けんために、数々のパードレをこの国に遣わし福音の導師を多く与えたことである、とする。

三章では、デウスを否定することが如何ほどの重罪であるか、真の道を知ってのち転ぶ者は掟を知らない者よりも地獄の苦しみはさらに深いこと、洗礼によってデウスから与えられたガラサ（恩寵）、カリダデ（愛）、後生における扶かりの希望のすべてが失われたとして、キリシタンが信仰を棄てる動機四点が上げられる。

イエス・キリストの御奉公人たるキリシタンは、丸血留に遭遇した時、人間の力のみに頼っては甚だ惨い苦しみに堪えることが出来ないとし、丸血留になることとは自力に非ず、ただデウスの御力を頼まなければ叶わないこと、そして、この頼母敷き（望み）さえあれば耐え難い苦しみはないとして、果てしない地獄の苦しみを受けるよりは迫害の短い難儀を快く受け入れて、デウスの御大切（愛）に対して烈しき御奉公を勤め不断からの覚悟が肝要である、と説く。

四章では、ヒイデス（信仰）を最後まで持ち続ける面目、またその深い功力について明らかにして「キリシタンの上に妨げ来たるべき時、ヒイデスをたぢろかさずして、イエス・キリストの御大切と御パシヨンに対し、如何なる難儀・辛労をも堪え」抜くことがイエス・キリストへのご奉公であるとする。大事なる時節にこそ真実の知音（友人）は顕れるとし、第一に勝れたカリダデ（愛）はデウスのために命を捧げることで、「是を指して御主の御言に、知音に対して命を捨つるよりも勝りたる大切なし、と宣也。是即丸血留の位也」とする。そして最後に、「デウスの御奉公に届くことは、デウスのグラウリヤ、イエス・キリストの御教の御名誉、宗門の面目、御法の弘まるべき基也」と結論する。

五章には、デウスに対し命を捧げ丸血留に成ることは如何ほどの位であるかとして、丸血留の位は、デウスの御前において最上の位でありこの世界に比べるべき位はない、とする。そして、聖パウロの言葉（コリント、前二ノ9）をもって、御大切の極めを顕し給う丸血礼数（殉教者達）の上においては当然の御褒美が調えられていると保証する。「御作者デウスを貴み奉る道は多き也」といい、「至極最上の御奉公と云うは、デウスに対して命を捨てること」であり、「知音に対して命を捨るに勝りたる大切無し」（ヨハネ、一五ノ13）と、四章で引用したデウスの御言葉が再び語られる。これはまさにデウスの教えの根幹を成す言葉である。

六章では、丸血留の覚悟とその準備について述べる。丸血留に成るべき人は面々その覚悟をすることであり、その覚悟の道五つが肝要とされる。即ち(1)謙りの善、(2)コンシエンシア（良心）を清浄にすること、(3)オラショを申し上げること、(4)妻子・従類ら周囲の者に善とヒイデスについ

て強く説き勧めること、⑸我が身よりもデウスの御誉れ・御名誉を第一とすることである。

最後に、御大切に催されるためには、心を動かされるには、二つの観念が便りとなるとする、即ち⑴デウスの善徳であり、⑵デウスが我等に与えた御恩である。御恩については御パション（受難）が他の何よりも勝れているために、御恩・御大切に報いるためには堪え難い苦しみはないと教える。「マルチリヨの勧め」では、イエス・キリストの御恩、特に御パションに対してキリシタンが如何に報いるかということ、ヒイデスを堅固に守り死ぬるまで御奉公を尽すべきであると結ぶ。

第三の書「マルチリヨの心得」は、禁制下のキリシタンがパードレもイルマンもいない状況下で何が科で何が科でないかを思い迷う事のないようにするために書かれ、四カ条から成る。準管区長ゴメスが一五九八年に執筆したという書き物が或いはこれの成立に関係している可能性が高いとされる。

第一条「諸のキリシタン、ヒイデス（信仰）を堅固に保つべき事」では、キリシタンはイエス・キリストの教えの信仰に肝要なる時には言あるいは所作に顕さなければならないとする。第二条「ヒイデスを背き科と成すべき所作は、何れぞと云う事、並に何なる科に依てヒイデスを失うぞと云う事」では六項について言及され、第三条「ヒイデスを背かずして作す事叶う条々の事」ではヒイデス（信仰）を守るための工夫と慎重な行動について述べる。第四条「丸血留に成る程の難儀出て来るに於ては如何にすべきぞと云う事」では丸血留の定義・条件が一四項にわたり述べられる。①丸血留になるためには、先ず死ぬこと、そして快く死ぬこと：「シツ（死）の事、肝要也、先一には人より害せらるるを心能く堪忍する事」。「死すると云は、クビを切られ焼コロシ、ハタ物に上げてころす斗に非ず、喩ば食物を与えずして餓死に及ばすか、……辛労難儀の道より死したるに於は丸血留也」、②「害せらるる者、智恵分別有る者ならば、その成敗（罰）を辞退せず心能く堪忍致して受るに於ては丸血留也、但、其成敗をイヤガリて死するに於ては丸血留にあらず、④……亦キリシタンなりとて成敗すべきにふせき戦う事は叶わず也、……デウスに対して心能く死せざるに依て也、⑤丸血留に成る人未だコンヒサン（告解）に顕れざるモルタル科（大罪）有と覚えば、コンヒサンを申す仕合有りながら申さずに於ては丸血留にては有るべからず、⑭丸血留の近付くト覚へん時、成すべき覚悟というは、先ずコンヒサン足るべし、その儀叶わずは後悔すべし、次にはデウスのガラサを以て今より後モルタル科

に落ち間敷と思ひ定め、ご免を乞ひ奉るへし、……呵責を受る間は、イエス・キリストの御パションを目前に観すへし」。これは、「マルチリヨの勧め」六章の最後の結論でもある。

キリシタンがどのようにマルチリヨに対処したか、殉教に対する心構えや心の準備がどのようになされたかが、この「心得」から知られる。

おわりに

「我が身の大切よりもデウスの御大切に催され、その御奉公・御名誉を目当てにせらるる人々を、いよいよ御納受なされ、猶高く勝れたるグラウリヤに備え給う也」との文言がある。この御大切を催すために二つの観念を専ら便りとすべしとされた。前述したデウスの善徳と、デウスが我々に与えた御恩とである。特に御恩については、人間のアニマ（霊魂）を救うために人間界に生まれて御パション（受難）したことが他の何物にもまして勝れたものとし、キリシタンはデウスの御大切に報いるために、最高の御奉公をもって応えなければならないとする。最高の御奉公とは、イエス・キリストが十字架に懸けられたように、キリストに倣ってデウスのために命を捧げることである。これがデウスに対するカリダデ（愛）であり、「知音（友人）のために命を捨てること」と同義に考えられ、その行為は「丸血留」の位とされた。

御法は教会が迫害を受ける時に栄え、苦しめられる時にこそ弘まるとの教えは、日本にも根付いた。一六三九年に江戸で殉教したペドロ岐部は、ルバング島でローマのイエズス会総会長から二十六殉教者の列福の報告を得て、「私が最も望むことは、彼等の取次ぎによって将来日本が平和になりローマ教会に従い、主キリストに甚だふさわしい花嫁になること……イエズス・キリストは彼にふさわしい花嫁になるように私達の国を艱難と危険と殉教とによって清め飾り立ててくださる……」と述べる。彼はローマ初期教会から続く殉教の精神を受け継いで、次代のための種子となることを願い実践した。殉教者の流す血によって、教会は新しい命を与えられて復活してきた。

キリシタン達がザビエルの宣教以来、教えられてきたマルチリヨの思想は、マルチリヨが「キリストの倣び」であり、キリストの証し人となることによってデウスの御旨に叶う御奉公をする、というものであった。従って、ヒイデスのために死ぬことが第一であり、マルチリヨを目前にした時には先ずキリストの受難を想起しコンヒサン（告解）を行い、次にデウスのガラサに頼って大罪に陥らないよう

に赦しを乞い、決して自力に頼ってはならないこと、死を甘受して成敗（罰）に抵抗しないことであった。「成敗を辞退せず心能く堪忍して受くること、その成敗をいやがりて死するに於いては丸血留に非ず」として、絶対無抵抗が要求された。デウスの御旨に叶う御奉公とは、デウスに対する絶対的な愛と、その証しとしての自己奉献であった。この聖なる行為は迫害の強化に伴って強調され、殉教者に対する敬慕の念は早くより培われてきた。聖遺物が大事にされ、殉教者の犠牲とその功徳が長い迫害下にも語り継がれ、潜伏したキリシタン達の心の拠り所となっていたことは浦上の潜伏キリシタンが見事に実証した。浦上のキリシタンが「マルチリヨ」の書き物を伝存してきた意味はまさにそこにあった。

（聖トマス大学教授）